

『王子様のコンシェルジュ』

著：上原ありあ

ill：Ciel

「なんですか!? サンプルを頼んでくるのは、僕一人で出来ますよ！」

シャラフの手を振りほどこうと腕を上げるが、彼は海斗の抵抗などこともなげに受け流す。悠(ゆう)々(ゆう)と海斗を従えて歩きながら言った。

「サンプルは必要ない。この店は、購入したものをすぐに使って試せる部屋があると、表に説明書きがあっただろう」

「そんなの見てません！」

「ああ、君は貼られているポスターを直視出来ずに顔を伏せていたんだったな。コンシェルジュとしては粗末な仕事だとは言えないが、興味深い店に案内してくれたことには感謝しているよ」

まるでビジネスの話でもしているかのような淡々とした口調で言いながら、シャラフは狭い通路の左右に所狭しと並んでいる商品を手を取っては海斗に渡す。

海斗は何に使うものなのか、まったく見当もつかない細長い棒状のものや、ボールが連なったものなど、押し付けられるまま片手で胸に抱え込んだ。

「あのっ！ これ、どうしたらいいんですか！」

いよいよ持ちきれなくなったとき、店の奥のレジにたどり着く。シャラフが視線で、それらをレジ横のテーブルに置くように示した。

混乱した気持ちのまま、海斗はどさどさと商品をテーブルに置く。店員の青年が無表情で商品を取り上げてバーコードを読み取り、黒い籠(かご)に移していった。

ことの成り行きがまったくわからず呆然としている海斗の隣で、シャラフが店員に何事かを言う。店員の青年が頷いて、籠の中の商品の上に古めかしい形の銀色の鍵を一つ置いた。

「先に籠を持って奥に行きなさい。私は会計を済ませる」

シャラフの声は、命じることに慣れた者独特の響きがある。

海斗は、いったい何のために、と問いたい気持ちをぐっと堪えた。ここまでさんざん不手際な仕事ばかりしてしまったのだ。コンシェルジュとして、今は黙って彼の指示に従おう。

そう胸の中で思いながら黒い籠を取り上げる。店員の青年が、無言でレジ裏に掛かっていたカーテンを開いた。

「あ……」

海斗は思わず、戸惑う声を上げてしまう。

カーテンの奥には、やけに細く薄暗い廊下が続いていた。狭い間隔で両側に並ぶドアが、薄暗がりの中にぼんやりと浮かび上がっている。皓(こう)皓(こう)と蛍光灯の灯りが輝く店内から見ると、そこは別次元のようだった。

「どうした、早く行きなさい。突き当たりの部屋だ」

怪しげな雰囲気気圧されて立ち竦んでいた海斗を、会計を済ませたらしいシャラフが急(せ)かす。

海斗は意を決して、薄暗い廊下に足を踏み入れた。

入ってすぐに、廊下の左右に並んでいるドアの中から妙な声が聞こえることに気付く。苦しげに喘(あえ)いでいるような……。これは、もしかして……。

海斗は、はっとして手にしている黒い籠を見下ろした。

ここは、この店の商品を試すことができる部屋——。つまり店の入り口に貼られていたポスターのようなことを実際にしている……!?

とっさにかあっと頬に血が上った。

どうしてレジの奥に通されるまで、ここでセックスをしている人たちがいることに気付かなかったのか。いろいろなことがあり過ぎて、思考停止していたとしか思えない。

海斗は手にしている籠の中身がひどく生々しいものに思えて、投げ捨ててしまいたくなった。しかし慌てて俯(うつむ)き、小さく首を振る。

こんなきわどい場所に連れてきたのも、シャラフの嫌がらせかもしれない。性に疎(う)とい自分をからかい、仕事を放り出して逃げ出すように仕向けられているのだろう。

——まんまと乗せられるわけにはいかない。毅然(ぜんぜん)とした態度で、コンシェルジュらしく振舞わなければ……!

胸の中で自分に言い聞かせ、場の雰囲気(ふんいき)に怯(おそ)んで立ち止まりそうになる足を無理やり動かす。

漏れ聞こえてくる喘(あえ)ぎ声に耳を塞(ふさ)ぎたくなるのを必死で堪えながら、廊下の突き当たりにあるドアの前に着いた。

精一杯の虚勢(きよせい)を張(は)って背を正し、手にしていた籠の中の一番上に乗せられている古めかしい形の鍵を取り上げる。

元は金色だったのだろうと思う、所々に錆(さび)が浮いている金属製のドアノブの下の鍵穴にそれを押し込んで回した。

「あ……」

扉を開けて見た、部屋の中の装飾に言葉を失ってしまう。

淫(いん)靡(び)な赤い照明に照らされた、窓一つないコンクリートの倉庫のような部屋の中。その天井近くに太い鉄骨が組まれていて、何に使うのかわからない長いロープが何本もぶら下がっていた。

その横には鉄の支柱で支えられている、赤いシーツで覆われたベッド。これも何に使うのかわからないが、ベッドを支える四隅(よすみ)の支柱には短いチェーンと革製の輪のようなものが取り付けられていた。

部屋の隅には鉄パイプを組んだだけの簡素なシャワーらしい設備と、この異様な雰囲気(ふんいき)にそぐわない優雅な猫足のバスタブがあった。

「商品を試すだけの部屋にしては、なかなか趣向(きゆう)を凝(こ)らしているな」

海斗の背後に立っていたシャラフが、そう言いながら海斗の腰を抱いて部屋の中に足を踏み入れる。がしゃん、と、固い音をたててドアが閉まった。

「僕はここで失礼(しれい)します！ 後(ご)ほどお迎え(むかひ)に参(まゐ)りますので！」

商品が入っている黒い籠をシャラフに押し付け、肩に掛けているショップの紙袋だけを持って部屋から逃げ出そうとする。だが、海斗はあっさりとシャラフの片腕(ひだて)で抱き止められてしまった。

「おっと……、私のコンシェルジュは、仕事を途中で投げ出さないはずだったが？」

笑みを含んだ声音(こゑ)が耳元(みみもと)で聞こえて、海斗はかっ頬(ほ)を赤くした。シャラフに押し付

けそこなった商品が入っている黒い籠と、ショップの紙袋を抱えたまま息を殺す。

確かにほんの数刻前、シャラフにそう言いきった。この部屋に着く前も、何度もコンシェルジュとして立派に仕事をやり遂げるのだと自分に言い聞かせてきた。

そもそも、こんな場所に連れてきたシャラフの真意は自分をからかい、コンシェルジュの仕事を放り出すように仕向けるためのはずだ。それならば、商品を部屋まで運んだところで仕事は完了と思っていたはずだ。

海斗はシャラフの腕で強く抱きかかえられたまま、顔を上げて浅く息をついた。「仕事は投げ出していません。この部屋に商品を運ぶことまでが僕の仕事でしょう？ 試すとか、そういうのはプライベートなことですし……」

声が途切れ途切れになってしまうのは、体を誠めてくるシャラフの腕の力があまりにも強いせいだ。呼吸が上手く出来ず、頭の芯(しん)に霞(かすみ)がかかってくるような気がする。

シャラフが、薄く笑って誠めている腕の力を緩めた。海斗は、反射的に深く息をつく。

そのとき、唇に柔らかなものが触れた。思わず、両手に持っていた籠と紙袋をどさりと床に落としてしまう。

「この手の店の商品を、一人で試してもつまらないだろう？」

唇が触れ合う距離のまま囁くシャラフの言葉に、海斗は目を丸くする。何か言わなければと唇を開きかけたとき、僅かに顔を傾けさせられて再び唇で唇を塞がれた。

とっさに息をのんだ海斗の口(こう)腔(こう)内に、ひどく熱く感じるものが押し込まれる。

それがシャラフの舌だと気付くまでに僅かの間が開く。その間にシャラフの舌は海斗の口腔内をすべて味わうかのようにねっとり動いた。

「う……、んう……」

混乱につぐ混乱のせいで息が上手く出来ない。海斗は目の前が白く霞(かす)みはじめたのを感じた。体に力が入らず、がくりと膝(ひざ)が崩(くず)れる。次の瞬間、シャラフが海斗の体を軽々と抱き上げた。

「あ……はあ……あ……」

やっと息がつけた海斗は、無意識のまま手の甲で唇を拭(ぬぐ)う。熱く湿った自分の唇の感触に戸惑い、目を上げるとシャラフの深い翠色の瞳があった。

——これって、キス……された……？

本文 p51～56 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>